

# わたしの原風景

21

織茂恭子

おりも きょうこ / 絵本作家



Ori mo

私が生まれた家は高崎の城下町の古着横丁の小さな洋服店だ。戦争が終わって父が帰ってきて閉めていた洋服店を再開した。私は五歳だった。家族は父母姉妹ふたり。しばらく経ってから叔父たちが戦地から帰ってきた。従姉妹も高校を卒業してやってきた。父は快く皆を迎え入れた。狭い我が家は窮屈でにぎやかで楽しくなった。特に楽しいのは真夜中のおなら演奏会だ。おならは実に個性的で、大きい音や小さい音、かわいい音や憎たらしい音、濁った音、澄んだ音……それにトランペットのおならも加わった。面白くてうふふと笑つのは私だけ、みんなぐっすり眠っている。あ、誰かが起きた。母だ。朝一番の早起きはいつも母。ハミングしながら朝食の用意。白いエプロンがよく似合う。洗濯機も掃除機も無い時代だったから家事は全て手作業。大変だと思っけど愚痴一つ言わずいつも笑顔だった。近所の人と話するときもお客さんと話するときも、子どもと話するときもいつも笑顔だった。笑顔は、母の心そのままだった。

ある日、我が家に犬がきた。真っ黒い小犬で、母の笑顔は倍になった。犬小屋を作って店先で飼った。あるとき犬嫌いの客が来ると「つーつ」とこらみつけ、いきなり噛みついた。かすり傷ですんだが、父は友達に頼んで、十キロ離れた川原にこっそり犬を捨ててしまったのだ。どこへ行ったのか、犬は帰ってこない。みんな寝ないで犬を待った。父も待った。わんわんと玄関の戸を烈しく叩く音に、皆の顔がぱっと輝いて急いで戸を開けた。ちぎれんばかりに尻尾を振って飛び込んできた犬を、ぎゅっぎゅっとお抱きしめた。よかったよかった。父の顔も笑顔になった。それから店を開けている間は、犬を放してやった。犬は自由になって余程嬉しかったのだろう、素直になって古着横丁にびたりびたりの犬に成長した。ところが突然犬は消えてしまった。それきりいくら待っても、犬は帰ってこなかった。拘束と自由——犬は自由を選んだのに、煮え切らない思いが今も続いている。帰っておいで、もう一度ぎゅっぎゅっとお抱きしめてあげるから。